

浜通り研修 飯舘E班

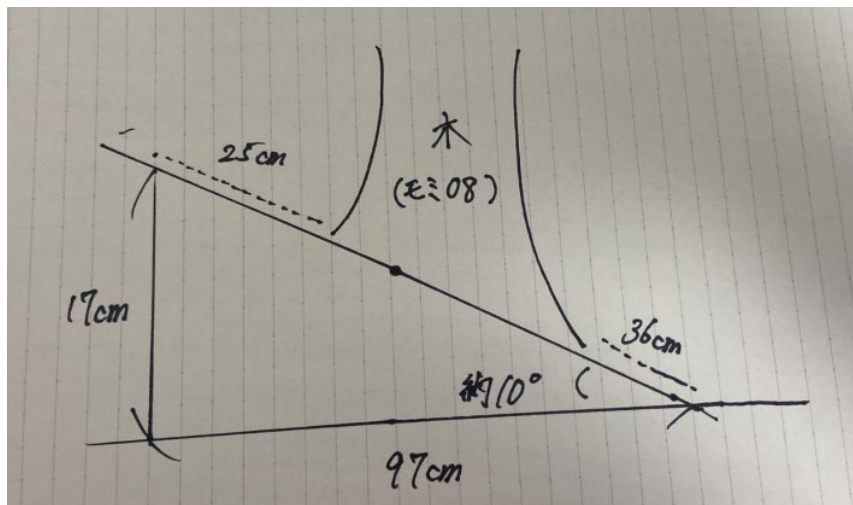
大島かれん・伊東香乃
高倉陽斗・矢田未咲・福原蒼樹

測定目的

木に対して、木の上側と下側の空間線量が違った
→土壌ではどのような結果が出るのか確かめる

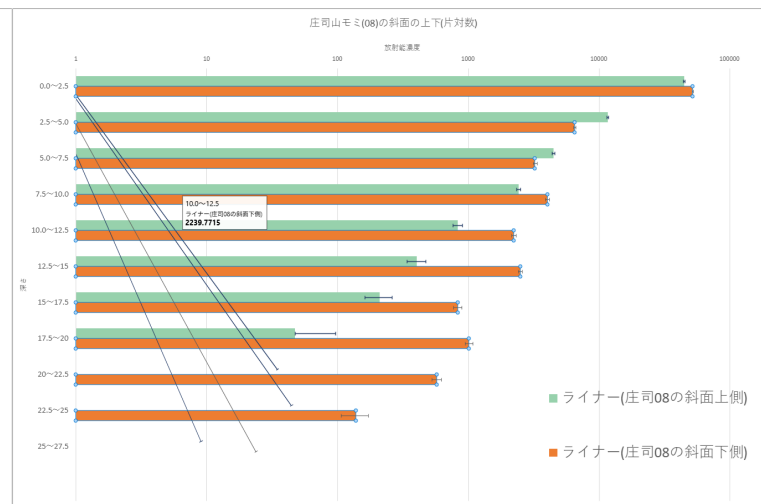
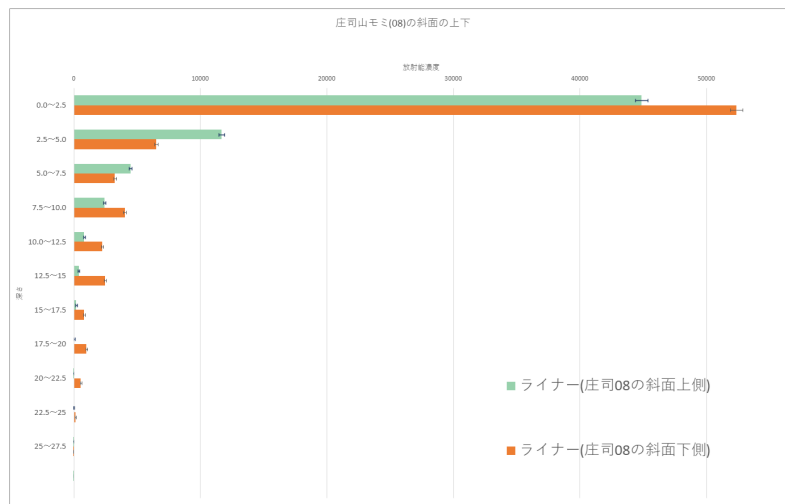
測定手順・方法

- ・ 上側は、木の幹の部分から25cmの地点。下側は、木の幹の部分から36cmの地点で試料採取した。
- ・ 緯度 37。39,59.20"N 経度 140。46,40.45"E



測定結果

- ・ 深いところは斜面の下側のほうが線量が高い
- ・ 深さに対して、放射能濃度は指数関数的に減少



考察

- ・雨が降った後で水分を多く含んでいたため、乾いた状態と比較すべき



データの量を
多くするべき

- ・下側ほど、表面から浅い位置に根がある
→木の根があることによって放射性成分が地中に浸透しにくい？

測定（植物＋5 cm 土壌）

キノコ（黄）（ホウキタケ？）

土壌	7628±134	(Bq/kg)
植物	30307±572	(Bq/kg)



測定（植物＋5 cm 土壌）

キノコ（白）（ドクツルタケ？）

土壌 10078±142 (Bq/kg)

植物 軸 52±24 笠127±39 (Bq/kg)



測定（植物＋5 cm 土壌）

キノコ（茶）（カワラタケ）

土壌 3849±67 (Bq/kg)

植物 502±28 (Bq/kg)



測定結果と考察

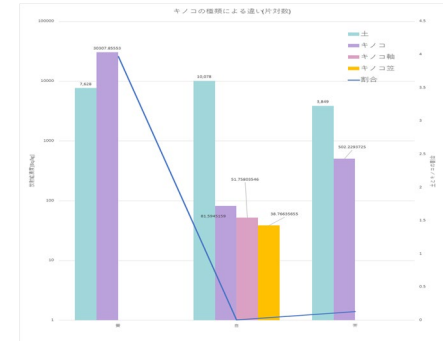
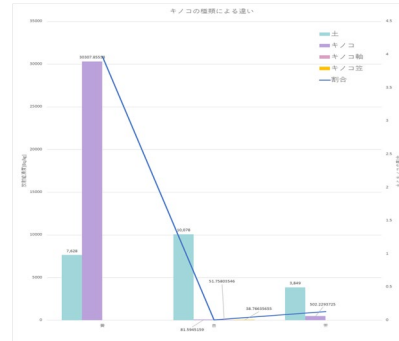
- ・キノコ黄の放射線濃度が他と比べて高い
- ・キノコ白の放射線濃度が低い
- ・腐葉土っぽい

〈考察〉

- ・土壌中にカリウムが少ない→セシウムよりも吸収量が多い
- ・腐葉土はカリウムが少ない→セシウムを多く吸収する？
- ・菌根菌→セシウム吸収度が高い
- ・腐生菌→セシウムの吸収度が低い

〈課題〉

- ・キノコの種類を特定
- ・他のキノコのサンプル
- ・同じ種で異なる場所



復興とは何か

物理的・経済的復興

社会的復興

心の復興・未来への展開

心の復興・未来の展開

「被災地が”過去を超えて”前へ進むこと」

”被災地”ではなく、”新しい地域の形”として発展すること

(ex. 福島イノベーション・コースト構想)

→産業集積の実現、教育・人材育成、交流人口の拡大に貢献できる

物理的な復興と心の復興

- 物理的な復興は「生活の土台」を整えるもの（社会的復興）
- ex ライフラインなど目に見えるもの
- 「心の復興」は人間らしく生きる力を取り戻すもの
- ex 目に見えない感情や心の安定の回復
- どちらもそう事が本当の意味での「復興」
- 大事なのは「**人の声に耳を傾けること**」

福島限定の課題

1. 帰還困難区域の存在
2. コミュニティの分断
3. 「戻る」か「戻らない」かの選択の葛藤
「定住派」「帰還派」
4. 風評・偏見の持続

福島の人はそのままで偏見を受けていると感じていない？

3. 「戻る」か「戻らない」かの選択の葛藤

「定住派」「帰還派」→世代によって考え方が変わる。



研究都市として発展させる 例えば 筑波研究学園都市



開発前



開発後

→「帰還派」の人は町の様子がガラッと変わるのには反対かも？

4.風評・偏見の持続

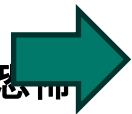
福島の人はいそこまで偏見を受けていると感じていない？

→町の人のお話を聞いたとき、風評や偏見についての話が少なかった。

問題は「福島」に対してではなく「放射線」に対する偏見

原因

- 放射線についての科学的知識の不足
- SNSや報道による不正確な情報の拡散
- 「見えない・感じない」放射線への不安や恐怖



教育が重要

福島に限定されない課題

1. 人口減少と高齢化
2. 医療・福祉の不足
3. 地域経済の低迷
4. コミュニティの希薄化
5. 若者の帰還・定住促進の難しさ

地方再生にどう生かせるか

1. “ゼロから地域を作り直す”経験
2. 「外部の支援」と「地域主体」の両立
3. 「信頼の再構築」という社会的課題

“ゼロから地域を作り直す”経験

新しい社会構造、インフラ・産業・コミュニティの再構築

(例)行政サービスや医療、買い物などのデジタル化、オンラインを活用した新しいコミュニティ作り、福島イノベーションコースト構想

「縮小社会」に適応する街づくり

- ・コンパクトシティ
- ・分散型エネルギー
- ・公共交通(生活バス)

“戻す”のではなく、“創る”という発想での地域再生モデル

「外部の支援」と「地域主体」の両立

震災直後は国や他県の支援に大きく依存

→外部の支援がなくなるとストップしてしまう

→100%依存するのではない「共創パートナー」としての位置づけ

地元発のプロジェクトで持続力を生むことが重要

(例) 福島イノベーションコースト構想、スマート農業プロジェクト、ふたば未来学園高校

「信頼の再構築」という社会的課題

「データで示すこと」と「人の感情に寄り添うこと」の両立
放射線リスクや安全性に関する情報への不信
→地方衰退の現場でも、「行政不信」「世代間の断絶」「閉鎖性」が課題
透明性のある情報発信と、“小さな対話”の積み重ねが、地域への信頼と参加を回復する

まとめ

福島の実験が示す教訓

- ① ゼロから作る力
- ② 共創パートナーとしての位置づけ
- ③ 信頼

参考文献

- <https://www.city.fukushima.fukushima.jp/soshiki/6/1025/1/5390.html>
- <https://www.potluck-yaesu.com/magazine/20240118/1614/>
- https://www.reconstruction.go.jp/files/user/topics/main-cat1/sub-cat1-15/03_Map.pdf
- <https://www.fipo.or.jp/framework#anc01>



ご清聴ありがとうございました

